



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

8. LCS

APGベアリングを用いたTKAの短期成績(第73回岐阜県整形外科集談会)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-07-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平松, 哲, 西本, 虎正, 伊達, 和人, 馬場, 岳士 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/12533

の整復が必要であり、整復や固定操作時にあらたな血行障害が生じないように注意することも重要である。また荷重の程度や時期の決定については臨床所見と画像所見を参考にしながら慎重に行う必要がある。

5. 重症骨盤骨折の初期治療についての検討

総合大雄会病院 整形外科

小石浩久, 佐藤正夫, 四戸隆基, 齊藤 満
同 放射線科

吉矢和彦, 永田剛史, 山根登茂彦

過去6年間に救急搬送された重症骨盤骨折症例25例について急性期の血圧, 血液データ, 画像所見について検討した。重症度の指標として総輸血量を用いた。

骨折型は Key&Conwell の分類でⅢ型が25例中23例, うちⅢ-C型(多発骨折)が12例を占めたが, 重症度の比較において各骨折型の間に有意差は認められなかった。急性期の大量輸液後の収縮期血圧, Hb 値が総輸血量との間で負の相関関係を認めた。CT 所見では造影される血腫数が2カ所以上では有意に総輸血量が多くなる傾向にあった。血管造影所見では内腸骨動脈からの出血や, 著明な血管攣縮を呈する場合 TAE で制御できない場合があった。

骨盤骨折に伴う後腹膜出血は致命的な出血性ショックを呈することがあり, その急性期においては TAE 後の開腹手術を想定した迅速な重症度判定が, 持続する出血に対しては, 再度 TAE を施行する必要性を考慮した上での厳重な管理が不可欠である。

6. *Vibrio vulnificus* 感染症の経験

岐阜市民病院 整形外科

河田好泰, 杉谷繁樹, 高津敏郎, 石川裕志,
土岐 玄, 加藤充孝, 中川偉文, 奥村仁菜
同 消化器内科
西垣洋一

我々は *Vibrio vulnificus* 感染症患者で救命しえた1例を経験した。

症例は55歳, 男性。C型肝硬変・肝癌で加療中。夏期に鮑の刺身を摂食。翌日朝から下痢, 左下腿痛を自覚。2日後ショック状態で当院へ搬送。敗血症性ショック, DIC, 壊死性筋膜炎と考え, 抗生剤を投与し全身管理を行い救命できた。両下腿に水疱を伴う紫斑を認めたが, MRI では筋膜より深層に病変を認めなかった。水疱の細菌培養で *Vibrio vulnificus* が検出され, 左下腿に頻回のデブリトメンを行い, 植皮にて皮膚欠損部を覆い, 患肢温存でき歩行可能となった。

Vibrio vulnificus は感染症は夏から秋に発症しやすく, 死亡率の高い疾患である。第三世代以降のセフェム系, カルバペネム系など多数の抗生剤に感受性を示すので可及的早期にこれらの抗生剤の使用が予後を大きく左右する。

7. 部分的第1趾移植により再建した小指欠損の1例

岐阜大・医・整形外科

大野義幸, 角田 恒, 岩田崇裕, 大西量一郎,
糸数万生, 清水克時

症例は47歳女性。H13年11月に調理中, 癲癇発作を起こし, ガスコンロで右環小指の熱傷受傷。小指は, PIP 関節で離断。植皮術受けるも小指断端は基節骨先端が露出し環指との間に皮膚性の合指を生じた。他医整形外科にて小指列切断をすすめられたが, 再建を強く希望し, 受傷1年後に当科紹介。第2趾移植をすすめたが, 足趾がなくなれることを希望せず, 左足より第1趾間を付けた部分的第1趾移植 (Wrap around flap + 1st web flap) にて第4指間および第5指を再建。末節骨は IP 関節を温存し縦割して採取。指骨長を健側と一致させるため骨移植を併用。Donor site は下腿外側穿通枝皮弁にて被覆。移植した第1趾外側面の bulkiness に対し術後3ヶ月で Hu の方法に準じてレンズ型に切除形成し良好な形態の小指が再建できた。合指を分離したことで, 環指の可動域制限も改善。欠損小指の再建にも本法は有用である。

8. LCS APG ベアリングを用いた TKA の短期成績

養老中央病院 整形外科

平松 哲, 西本虎正, 伊達和人, 馬場岳士

我々は PCL の機能が十分期待できる OA 症例には積極的に APG bearing TKA を行ってきた。LCS Universal System が日本で使用されるようになって5年近くが経過しており, 同 TKA の短期術後調査を行った。調査対象症例は, PCL を温存する APG Type を使用し1年以上経過した OA 症例で, 内反膝, セメントレスに限った25例27膝のうち, 追跡調査可能であった21例23膝である。対象患者の年齢は61歳から80歳の平均72歳であり, 最長フォローアップ期間は4年9ヶ月であった。術前屈曲角は平均 $108.2 \pm 18.4^\circ$ から術後屈曲角 $120.8 \pm 16.1^\circ$ と有意に改善され, 屈曲達成率は平均114.3%であった。JOA スコアは術前平均 45.7 ± 9.6 点から術後 79.8 ± 10.7 点と改善し, 術前 FTA は $190.1 \pm 5.1^\circ$ から術後 $174.3 \pm 2.4^\circ$ と改善していた。

PCL 温存 mobile bearing TKA の短期成績は満足できるものであり, 杖なし歩行が期待, あるいは希望される症例では PCL は重要と考え, 可能であれば残すべきと考えている。

9. 両変形性股関節症に対し両側同時 THA を施行した1例

岐阜大・医・整形外科

長縄敏毅, 糸数万正, 福田 雅, 伊藤芳毅,
清水克時

(目的) 両変股症の患者に対し, 両側同時に THA を施